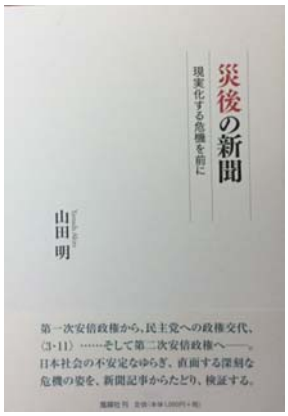
戦後・災後に目をつぶるな

2014 年 8 月に出版した拙著『災後の新聞』の最後（あとがき）に次のように書いた。いま「戦後レジーム」が問題視されているが、3・11 は敗戦の 8・15 に匹敵するほど日本社会の画期をなすものだ。戦後とともに、「災後」の日本社会のあり方が問われている。



その後も「戦後」と「災後」に注目してきた。表題の日経新聞 3 月 3 日朝刊「東日本大震災 5 年　問いかける言葉」の見出しを見て、拙著の問題意識との接点に注目した。問いかける言葉は、文芸評論家の加藤典洋さんだ。

明るい部屋から暗い部屋に入ると、最初は何も見えない。だがやがて目が慣れてきて、そこに何があるのかが徐々に見えてくる。震災から時間がたち、ようやく私たちは問題の構造を見通せるようになってきた。

問いかける言葉
東日本大震災5年
▷4◁
文芸評論家 加藤 典洋氏
戦後・災後に目をつぶるな
かとう・のりひろ 1948年山形県生まれ。著書に「アメリカの影」「敗戦後論」「戦後入門」など。

1986 年にチェルノブイリ原発事故があり、その 5 年後にソ連が崩壊した。日本社会にとっても、震災から 5 年は大事な節目になるだろう。これからの社会を作るための新しい条件を、勇気と度量と好奇心をもって迎え入れる時だ。

震災は昨年 70 年を迎えた戦後社会の問題をも照射しているとみる。

「戦後」と「災後」は悪魔の蛇の舌のように 2 つに分かれている。私たちはこの両方に同時に対応することを求められている。日本の戦後は、経済成長によって国内的文脈においては終わった。だが一方で米軍基地問題など対米従属的な構造があるため、国際的文脈においてはまだ終わったとはいえない。そんな跛行性の戦後が、今度は「災後」にぶつかった。そういう状況に今の私たちはいる。

有限性の社会を人間がどう生きるかという災後の問題はすぐには答えが出ない。そこから目をそらせようとするかのように、秘密保護法や集団的自衛権など戦後的問題が出てきた。山積する問題の一部をつまみ食いして、別の問題に目をつぶることがあってはならない。戦後と災後の問題は同時かつ全方位的に考え尽くすべきものだ。

（2016年3月7日）